

「ヴァニタスの檻」

宇津木 咲来

— ボーン …… ボーン —

遠クの柱時計が何やら使命感ヲ持ッタ様に鳴いた。今日モ埃にマミレタ此ノ鳥籠の中デ、伽藍洞ヲ胸裏に仕舞ッテ白馬の王子様が迎えニ来ルのヲ待ちテルのデス。夢想家ダナンテ云ワないデ下さい。ワタシは待つテイるノデス。待ち焦がれてイルのデス。

「vanitas vanitatum, et omnia vanitas. だつてさ。知っているかい？」

「いいえ知りませんわ。何ですの？ それは。」

「空の空、すべては空なり、だそうだ。僕も度々考えるんだ。この世に生きる上で何か価値の有るモノを得られるのだろうか。生きるなんて表現しているけれどこの肉体は所詮は使い捨ての器なのではないのかと。」

「まあ、お兄様。何を仰いますか。こうして二人慎ましく生きる事に価値は無いと思っておられるのですか？」

「現に二人じゃないか。父上も母上もコレヘトの言葉通りに儚く散ってしまった。そして僕達がこのアンティークショップを背負う事になったんだ。不満に思う所は無いさ。けれど疑問に思うよ。寿命が来たら枯れ、また次に繋ぐ。その繰り返しだ。矢張り人の生に意味や価値なんかを見出す事が出来そうに無いよ。魂の為の器なんかにさ…。」

「そんな事は考えずに生きましょう。普通に。」

〇〇の日記より（次より略す事とす。）

久しぶりにお兄様とアンティークショップの奥にある物置を整理致しました。久しぶり、と言いましても幾十年か放置されていたそうで部屋全体が薄暗く、余りの埃くささに鼻腔を覆いながらそろりそろりと埃を舞わせぬように爪先から歩を進めました。包み込む

様な生温かさと薄闇が押し寄せてきました。その淀んだ空気に刹那的に足を掬われそうになりましたわ。ですが、お兄様が私の肩にお手を触れて下さったので服を灰色にせずに済みました。それはさておきです。その部屋の奥でお兄様がアンティークドールを見つけましたの。埃を被り、蜘蛛の巣が張り巡らされたロッキングチェアに悠々と佇むその顔を覗くと、涸々とした双つの黒が有りました。有るといっても無かったです。頬や手足はどこかしこも煤けておりました。腕や脚と同様に黒く煤けたボロ雑巾をその身に纏っておりまして。曾て、それはそれは絢爛なる召し物であつたに違いありません。かの様な憐れなお人形さんは、四、六二尺程の、ドールとしては大きめの幼い子と大差ないドールでしたので廃棄してしまうには惜しい品だと言うことなのです。確かに斯様なドールは物珍しく、あまりお見掛け致しませんがなんとお兄様が修理を為さると仰るのです。私と致しましてはお兄様と言えど厳しいのではとも考えましたが、彼の人は一度仰れば聞く耳すらお持ちにならない方なので私共は信ずるのみに御座います。ですがお兄様なら屹度、安々と為し遂げてしまひましょう。たかが日記なのに長々と書き連ねてしまひましたわ。

○月○日

今日は早朝からお兄様があのお人形の修理にあたっていました。暮れにお兄様の部屋へと行きますと、床に眼のすっぽりと抜け落ちた頭部と胴。その左右に腕、そして脚が人の形を成す様に転がっていたものですので大変不気味で吃驚致しましたわ。慣れているつもりでしたが……。お兄様が一度拭つたのでしょう。お顔や諸々の部位からは昨日の埃や灰といった塵はすっかり無くなっておりましたが、未だ煤けた様な黒ずみは残っていました。火傷と言った所でしょうか。煤まみれの布切れと化した服を剥がし、関節と関節をバラバラに外してゆく。そして溝等を余すことなく拭う。これだけで今日一日が終わってしまう程に大変な作業だった様です。作業が大変、というよかはお兄様が可成りの凝り性で普段なら見える筈の無い所まで拘る質ですので、日暮れまで掛かってしまうという訳です。着々とドールが出来あがってゆく様子が私にとって、逆も愛おしく感じます。それはお兄

様も同じ事でしよう。だってお兄様ったらお人形に恋しているかの様な眼を向けているところがあるんですもの。却説、何時いつになったら可愛らしいお姿と対面できるでしょうか。私には見守ることしかできません故、只々心待ちにするしかないというのは少々牴牾こごしく思います。

○月○日

―未ダ、差さヌ光。闇の中デ微力に聴キマシタ。薄情で穩健ナ其の声音ヲ。何ヨリモ濁ッて透キ通ル其ノ声音ヲ。闇ノ中デ微カニ、凍エル御指の熱ヲ、覚エマシタ。フフ…まるで夢模様。屹度、創造主おうじさまに違イ無イワ。嗚呼…ドウカ光よ。差しマス様ニ。―

今日のはあの子の肌が白く滑らかなものへと変わりましたの。あんなに煤けていたのに。お兄様は素晴らしい腕をお持ちですわ。未だ毛髪も、唇も、ましてや眼玉すらも不揃いなのに本当の人間と錯覚してしまうのです。身体もバラバラなのにも関わらず、ですよ。この段階でこれ程までに目を惹く代物には中々お目にかかれない物ですので、私も大変気持ちが高揚しているのですよ。明日は一度全て引き抜いた髪を新しく与えるそうです。なんせ肌なんかと同じくして焦げついた髪でしたのでね。完成に近づくにつれ増々人の形になってゆくのを肌で感じます。

○月○日

昨日お兄様の言った通りにドールに髪の毛が生えられました。幾重にも小さな輪にして垂らしている明るい色の髪には、誰もが釘付けになられることでしょう。お兄様はその一束を指先で掬い上げるとうっとりとした様子でそのブロンドの艶を見つめるのです。あれは一いち人形に向けられる表情なのでしょうか。恍惚とした…。形容しきれぬ表情カオをしていらしたんですの。まるで恋を…真逆その様な事はあろう筈も御座いませぬわ。所詮は人の形を模しただけの物なんですから。唯の硬い物体に、それも頭部だけの段階で恋など。考えるまでもありませんでしたわ。

○月○日

―此処ニ在ル。此処に。デも… 何かが無い。〃何か〃が無い。ダケド在る。此処にナラ。恍惚とシた息ヅカイヲ。ワタシニは判ル。此れハ―

遂に人の形に成りましたわ。漸くあのドールの関節と関節が繋がりましたの。未だ着せる服が出来あがっていないので裸体なのです。いくら人形と言えど、人間を象っている以上は致し方ないでしょう。きめ細やかな陶器の様な肌に華奢で今にも碎けてしまいそうな弱いその四肢にどこか艶かしさを感じずにはいられないのです。気が狂ったのでしょうか。ですがあの人形にはどうしても目を惹かれてしまうのです。お兄様もこれ程の仕上がりにも満足がいった様子で「服を着せるのが勿体無い程だ。とは言え何を着せようか。云々。」なんて言っておられました。のめり込むとこの様に饒舌になるのもお兄様の癖でしたね。お兄様が愉しそうにしているだけで私も嬉しく思います。唯、いつもと、何かが違う様なのです。あの時から違和感が拭いきれないのです。勘違いであればいいのですが。

○月○日

素敵なロリイタができましたわ。まったくお兄様の手際の良さには脱帽ですわ。真っ白な生地に着し気も無く遇われたフリルやレース。そして、何よりも、目を、奪われるのは。俗世の垂泣せし女共の雫を溢した様に鏤められたスワロフスキーが此方の世界を侮蔑するかの如く耀くのです。純白に身を包ませる彼女は、神々しさを感じる程に… 息を飲む程に美しい。これ以外に形容する術は存じ上げません。残すところは眼球のみです。兄曰く、瞳孔、虹彩は人を映し出す鏡らしいのです。何を映すかという事を脳髓が擦り切れんばかりに懊悩しておりますの。どんな色を宿すのか私も楽しみですわ。(日付不明)

―此れハ夜明ケ? 目覚メ? 世界が、美シイ。耀ウ世界。そシテ、彼の顔^あヲ我が瞳ニ映シた。彼ガワタシの空虚ナル〃何カ〃に灯火ヲ呉れタのデスね。何モカも満タサれた。此

ノ気持ちハ一体何なノでしヨウか。身ガ焦ガサレテ融ケテユク様な――

「太宰治のフォスフォイレックスセンスを読んだんだ。」

「これまた唐突ですね。如何いかてしたの？」

「――まあ、綺麗。お前、そのまま王子様のところへでもお嫁に行けるよ。」

「あら、お母さんそれは夢よ――。」

「この二人、何方が夢想家に思える？」

「そうですね。そのまま受け取ると母親が夢想家で娘が現実家リアリストかの様に思えますが。態々質問されるという事は逆なのですか？」

「太宰治はここで、母がその様な夢の可能性をみじんも信じていないからこそ、やすやすと夢を言えるのであって、それをあわてて否定する娘の方が、もしや、という期待を待って否定しているように思われると言っているんだよ。」

「言い得て妙。と言った所でしょうか。」

「それで想起したんだ。ヴァニタスの事について。例えば先刻の母と娘に喩えると、僕は肉体を使い捨ての魂の為の器だと言った。それに対してお前はあわてて否定しただろう？」

「それでお兄様は世を空の空だなんて思っていないからこそやすやすと言って、一方の私はうっすらとそう考えているからあわてて否定した。という事ですね。」

「合っているかはさておき、中々に興味深い着眼点だと思っ
てね。それともう一つ。」

「ええ、何でしょう。」

「あの子の瞳めをどうしようかとずうっと考えていてね。」

「私は助言を与えるなんて事致しませんわ。お兄様の作品ですもの。ですが強いと言うなら……この美しくて醜い世界を映し出して下さいませんか。」

「アハハ。善いじゃないか。この輝きに満ちたきつたない世界を映し出してみようか。」

漸く完成致しましたわ。長い様で吃驚する程あつと言う間な気がします。彼女は宵闇を
 月星が色どる夜空と深淵を想起させる群青を宿していた。暗くて透き通った鏡で明るく濁
 つきぼ
 った世を映し出していた。だけれど確信してしまった。太宰先生の言っている事は矢張り
 的を得ているのかもしれない。私が確信した事。それはお兄様があの人形に恋をしている
 という事。虹彩と瞳孔。それらは人を映す鏡。人形を見つめるその眼は、^{まだ}一切の曇りな
 くあれを見据えていた。恋をしている。その時点で世の中を空の空だなんて思える筈がな
 い。私はお兄様を敬愛しています。けれどそれがなんだか一方的に感じるのです。これ程
 愛しているのは私だけだったのでしょうか。こんな事を考えていると空の空。真にそう思
 えてきます。嗚呼…判りました。これこそが愛の果て。故に人は狂うのですね。

〇〇町ノ屋敷ニテ火事。男性一人ガ亡クナル。男ノ焼死体ノ胸骨ノ辺リニハ夜空ガ融ケ
 出シテイタ。ドウヤラアンティークドールヲ抱キ締メナガラ逝ツタ様デアル。融ケタモノ
 ハソノドールノ眼ン玉トイウノガ詳細デアル。火ヲツケタ犯人ハ男ノ妹デアッタ。彼女
 ハ、コウ供述シテイル。「心ガメマグルシク映リ変ワツタ。何故カ？ 自分ニモ判ラナイ。
 何故ナノデショウカ。デスガ明確ナ事ハ、愛スル人ヲコノ手デ、愛スル人ノ望ム形デ。命
 ヲ賭シタ美術デハナイデスカ。焦ゲツク皮膚。両想イ同士ノ恋人達ノ流ルル涙。融ケ出ス
 世ノ中ノ醜惡サヲ風刺シタ硝子。現場ニ香ル哀愁。正ニ芸術。サゾ悶エ苦シンダコトデシ
 ヲウ。皮膚ガメクレ呼吸^{イキ}ヲスレバ肺ガ焼ケル。ソレモ片方ダケ。残酷ダト思イマスカ？
 デモ愛スル者同士ヲ心中サセテヤツタノデスヨ。フフ。」
 中々ニ狂氣的デスネ。

ここ迄話を聞いても正直な所理解が追いつかない。彼女は何故、突然に愛する兄を手にか
 けたのか。彼女は兄とドールが両想いだと言っている。人形の心が判ったとでも云ふの
 か？ そしてこの人形、見つかった時も煤けて焦げた様な肌をしているのだ。そして何よ
 りも眼球が無かったのだ。とするとこれは…。